

年が明けて早 2 か月が過ぎましたが、その間、さまざまな事業が行われました。本号ではそのうちの主な事業と出来事についてご報告いたします。

## 目次

1. 展示「いけばな」 2  
お正月恒例となったいけばなインターナショナルパリ支部によるいけばな展示会が地上階ホールで 1 月 14 日 (火) から 18 日 (土) まで開催され、日本のお正月の風情を来場者に楽しんでいただきました。
2. 「伝統と先端と～日本の地方の底力」展示・実演・ワークショップ 2  
CLAIR (一般財団法人自治体国際化協会) パリ事務所との共催により、1 月 21 日 (火) から 2 月 1 日 (土) まで、地上階ホールで 17 の自治体に参加した展示会と関連する実演やワークショップを開催しました。
3. 地上階店舗「匠フレーバース」開店 3  
ジャポニスム 2018 期間中に同イベントの情報センターとして活用されていた地上階店舗スペースに、'ユーロ・ジャパン・クロッシング社が「匠フレーバース」という新店舗を 1 月 21 日 (火) に開店しました。
4. 公演・アーティストトーク・展示「トランスフィア #7 塚原悠也+コンタクト・ゴンゾ」 4  
1 月 29 日 (水) から掲題展示会が始まりましたが、前日の 28 日 (火) にはオープニングとコンタクト・ゴンゾによるパフォーマンスおよびアーティストトークが開催されました。展示会場ではパフォーマンスのモニター画像が流れていますが、アーティストがパリに滞在するオープニング時とクロージング直前の 3 月 26 日には、身体と身体がぶつかる実際のパフォーマンスが披露されます。
5. 講演「装飾美術館図書館-知られざる日本コレクション」 5  
1 月 29 日 (水) 午後 18 時から装飾美術館図書館所蔵資産責任者のロール・アベルシル氏による掲題講演会を小ホールで実施しました。
6. 食文化イベント「京都 真葛焼 宮川香齋家の茶懐石の器」 6  
2 月 7 日 (金) と 8 日 (土) に真葛焼宮川香齋家嗣子の宮川真一氏による食文化イベント「京都 真葛焼 宮川香齋家の茶懐石の器」が 6 階のレセプションルームと茶室で開催されました。
7. コンサート「和太鼓 真」 8  
2 月 8 日 (土) 15 時から、パリで活躍する和太鼓グループ「真」による公演が、俳優の浅井宏美さんと箏・三味線奏者の日原史絵さんの参加を得て地下 3 階大ホールで実施されました。
8. ワークショップ「Grand voyage with Africa」発表会 (於ユネスコ本部) 9  
2 月 13 日 (木) 午後、パリ 7 区にあるユネスコ本部の大ホールで行われた「文化多様性保護促進条約会議」の一環として「Grand voyage with Africa」に招待されるアフリカの若手女性映像作家たち 10 名の選考発表会が開催されました。同プロジェクトにはユネスコ日本信託基金と国際交流基金が支援しています。

## ① 展示「いけばな」

2020年1月14日(火)から18日(土)まで、いけばなインターナショナルパリ支部の会員たち(池坊、小原流、草月流)によるお正月恒例の展示会が地上階ホールで開催され、日本のお正月の風情を多くの来場者に楽しんでいただきました。



いけばなインターナショナルパリ支部の会員たちによる「いけばな」展

## ② 「伝統と先端と～日本の地方の底力」展示・実演・ワークショップ

1月21日(火)から2月1日(土)まで、CLAIR(一般財団法人自治体国際化協会)パリ事務所主催による第7回「伝統と先端と～日本の地方の底力」展を地上階ホールで開催しました。



地上階ホールで実施された「伝統と先端と～日本の地方の底力」展

今回の展覧会では、日本人の生活に不可欠な三要素「衣食住」の観点から、青森県、新潟県、富山県、長野県、山梨県、京都府、福岡県、金沢市、高山市、福井市、鶴岡市、名古屋市、浜田市、倉敷市、久留米市、熊本市、富士川町の 17 の自治体から匠の技を駆使した工芸品が出品されました。サイドイベントとして倉敷の特産である畳縁や真田紐、ミニ畳のワークショップ、福岡の博多織や名古屋市の三方、長野県の組子、富山県の高岡銅器や漆器、越中和紙、金沢の金箔うつしや貼りなどの実演が行われました。

大変評判がよく、週末の来場者は 600 人を超え、正味 10 日間の会期全体では 4000 人に達しました。

### ③ 地上階店舗「匠フレーバース」開店

第 7 回「伝統と先端と～日本の地方の底力」展が始まった 1 月 21 日（火）に地上階店舗の「匠フレーバース」が正式にオープンしました。

ジャポニスム2018会期中は同イベント群の情報センターとしてポスターや図録等が展示されていましたが、同シーズンが終了後は従来通り店舗スペースとして活用するため、入札手続きを経て、ユーロ・ジャパン・クロッシング社が応札し、このほど開店したものです。

同社はイベント等の企画会社でもあり、もともと地方自治体とも関係が深い企業ですが、最初の企画テーマは埼玉県の特産品や工芸品などを品揃えしました。

初めの 5 日間には宮大工が組み立てた 1 帖の小さな簡易茶室で来店者にお茶が振る舞われました。

地上階ホールで開催された「伝統と先端と～日本の地方の底力」展とも親和性がよく、両方のスペースで相乗効果が働いたように思います。



地上階店舗「匠フレーバース」のオープニング

#### ④ 公演・アーティストトーク・展示「トランスフィア#7 塚原悠也+コンタクト・ゴンゾ」

1月29日(水)から掲題展覧会が地上3階の展示ホールで始まりましたが、前日の28日(火)にはオープニングとコンタクト・ゴンゾによるパフォーマンスおよびアーティストトークが地下3階の大ホールで開催されました。

パフォーマンスは18時から30分ほど行われ、前半の15分間はメンバー3人による身体と身体の間をつなぐ合いが展開されました。ガツンと音がするほどの激しいつなぐ合いと絡み合いで、次の動きが予測しづらいところが特徴ですが、最後には客席にまで乗り込んで絡み合いを始めました。ただ、決して理性を失っているわけではなく、ものを壊したりケガしたりしないよう細心の注意を払っているように見受けられました。

後半は会場に用意した沢山の木の枝を3人が舞台上に当初から上がっていた観客同士の身体に挟むような形で、次々に枝をつないでいき、まさかの筆者が座っているところまでやってきて前列の観客の肩と私の手のひらをつなげ、隣に座っていたトルコ文化センターの館長、そして前列の観客に戻っていくなどして、舞台上と前方に座っている会場中の人々を枝をつないでしまいました。観客参加型のパフォーマンスに来場者たちは大いに楽しみました。

その後、本企画アーティストディレクターの岡部あおみさんを交えたアーティストトークが実施されました。

彼らの展示作品もそうですが、偶然や即興性が生み出す予測し得ない効果を大事にするのがコンセプトのようです。人工知能や精密機器が織りなすますます非人間的な社会へのアンチテーゼとしての生身の身体や自然の素材を使った作品づくりを目指していると感じました。



パフォーマンス中に筆者のところまで枝を持ってきた塚原悠也氏



パフォーマンス後、地上3階の展示風景を映しながら地下3階大ホールで実施したアーティストトーク

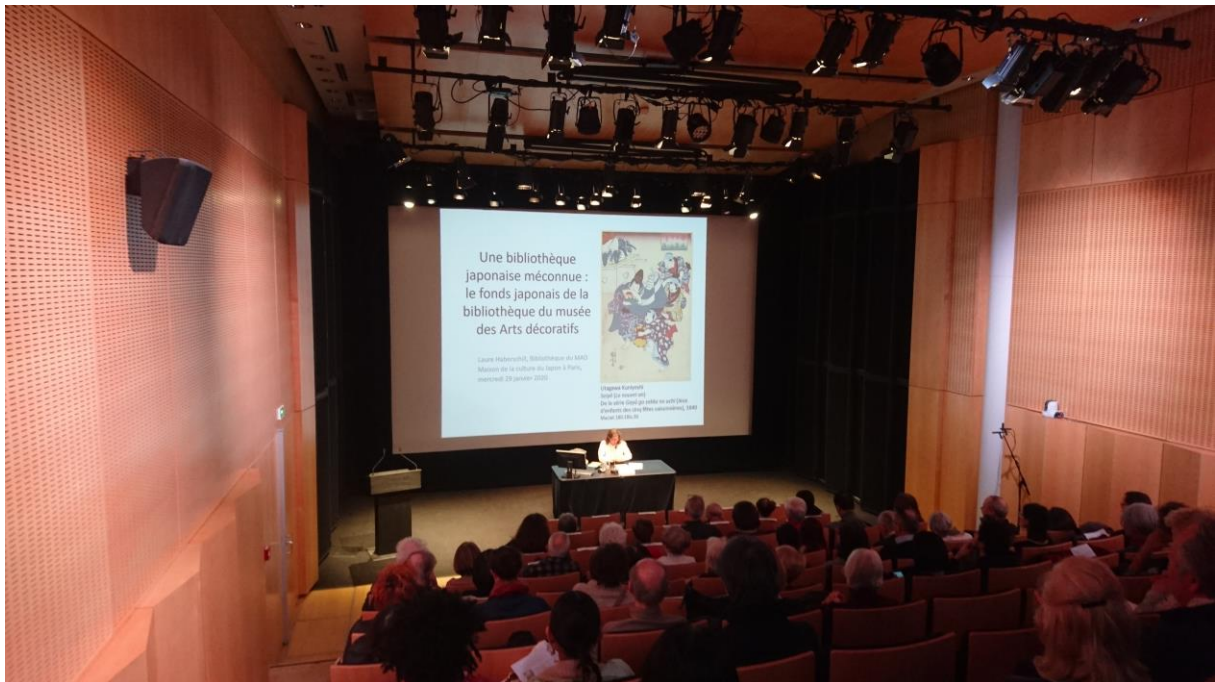
## ⑤ 講演「装飾美術館図書館-知られざる日本コレクション」

パリの装飾美術館は2018年11月から2019年3月にかけて「ジャポニスムの150年」という展覧会を開催しましたが、その際に同館所蔵の明治から現代までの伝統工芸品や民芸品、商品デザイン、ポスター、ファッション関連品などの日本美術コレクション1400点がテーマ別に紹介されました。それほど多くの日本美術コレクションを所有している装飾美術館ですが、実は同館図書館にはまだ知られていない18、19世紀の挿絵入り日本書籍、版画類が1000点近く所蔵されているそうです。

それらの中心となるのはエマニュエル・トロンコワが1894年から10年余り日本に滞在し蒐集した膨大な数の日本の挿絵本や版画類です。そのことは2019年1月にパリ日本文化会館で開催した日仏ダイアログ「日本人が見たフランス、フランス人が見た日本」でも国際日本文化研究センターの荒木浩教授やフランス国立極東学院のクリストフ・マルケ教授・学院長、京都市立芸術大学の柏木加代子名誉教授らが話題に取り上げました。

この度は、装飾美術館図書館のご厚意により、同館所蔵資産責任者であるロール・アベルシル (Laure Haberschill) 氏から、同館に所蔵されているトロンコワ・コレクションを中心とした「知られざる日本コレクション」についてその成立過程や内容について詳しく解説いただきました。本講演会は2020年1月29日(水)に弊館地上階にある小ホールで開催されました。

聴衆の中には日本美術やジャポニスムの専門家も少なからずいましたが、講演後、自分も知らないことが沢山あり、非常に有益であった、と感想を述べていました。



講演会「知られざる日本コレクション」の冒頭の模様

## ⑥ 食文化イベント「京都 真葛焼 宮川香齋家の茶懐石の器」

2月7日(金)と8日(土)に真葛焼宮川香齋家嗣子の宮川真一氏による食文化イベント「京都 真葛焼 宮川香齋家の茶懐石の器」が6階のレセプションルームと茶室で開催されました。

両日とも12時半(10品コース)、15時15分(8品コース)、17時15分(10品コース)の3セッション実施されました。筆者が参加したのは7日12時半のセッションでした。まず、宮川真一氏による季節感溢れる真葛焼向付と漆の椀の解説があったのち、次々に供される茶懐石料理の説明を受けながら食事をいただくという趣向でした。

茶懐石料理は京都の三ツ星レストラン「瓢亭」の元シェフで、近々パリに茶懐石料理のレストラン開店を予定している料理人秋吉雄一朗さんが腕をふるったものです。飯、汁、向付、煮物椀、汁替、焼物、焚き合せ、八寸、香の物、主菓子(虎屋パリ製)、干菓子(鍵善良房製)、酒(弥栄鶴竹野酒造の生酒 旭蔵舞 2019)そして抹茶が振舞われました。器を愛でながらめったに味わえないような美味しい料理を味わうという贅沢な時間を過ごし、参加者たちは大変満足した様子でした。

食後は隣の茶室に場所を移して、歴代の宮川香齋家の陶芸家が製作した茶椀に点てられたお茶を賞味してお開きとなりました。

京都の茶懐石料理を食しながら、真葛焼が料理にどのように使われているかを知ることができ、日本の食文化を総合的に知っていただく非常に良い機会になったと思います。



7

真葛焼を使った向付と盃、飯と汁の椀



パリ日本文化会館の6階茶室で個々の真葛焼の説明をする宮川真一氏（左端）

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一の見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。なお、撮影者の記載がない写真は筆者が撮影したものです。

## ⑦ コンサート「和太鼓 真」

パリで活躍する和太鼓グループ「真」による公演が2月8日(土) 15時から開催されました。8日はこの太鼓公演に続いて、15時15分から食文化イベント「京都 真葛焼 宮川香 斎家の茶懐石の器」があり、また、16時からレクチャー・デモンストレーション「源氏物語と日本文化」(ハイライトニュース No.32 でご報告します) がありましたので、非常に濃密で賑やかな土曜の一日となりました。

大ホールで行われたこの和太鼓公演もほぼ満席状態になりました。筆者は16時からの「源氏物語と日本文化」の冒頭挨拶がありましたので、太鼓公演は40分ほどしか拝聴できませんでしたが、俳優の浅井宏美さんによる日本昔話「古事記」の語りから始まって、日原史絵さんの箏と三味線の演奏があり、そこへ太鼓が静かに加わっていくという非常に凝った演出のイントロでした。途中で退席せざるを得ませんでしたが、終演に向かって非常に盛り上がった演奏会だったと聞いています。



「和太鼓 真」の公演風景



## ⑧ ワークショップ「Grand voyage with Africa」発表会 (於ユネスコ本部)

2月13日(木)午後、パリにあるユネスコ本部の大ホールで行われた「文化多様性保護促進条約会議」の場で「Grand voyage with Africa」に招待されるアフリカの若手女性映像作家たち10名の発表会が開催されました。これはアフリカの女性を支援したいユネスコと、次世代の作家を育成したい「なら国際映画祭(NIFF)」との思いが重なり、外務省からユネスコへの拠出金である日本信託基金と国際交流基金の支援のもとに実現したプロジェクトです。

ユネスコのオドレー・アズレー事務局長は、司会を務めたユネスコ文化局のトゥッサン・ティエンドレバオゴ文化的表現多様性エンティティ長(ブルキナファソ出身)の質問に答える形で、次のように述べました。

「まずこのプロジェクトに取り組んでいる河瀬直美監督、そしてこのプロジェクトを支援している日本政府ならびに国際交流基金、(筆者を見ながら)とりわけ本日その代理の方が見えています。安藤理事長への感謝を述べたいと思います。このプロジェクトは日本で開催されたTICAD(アフリカ開発会議)の場において議論された文化多様性促進の観点と、その後ワガドゥグーで開催されたFESPACO(ワガドゥグー全アフリカ映画祭)の討論会の場で女性監督の発表の場が少ないことなどが議論されたこと、その二つの出来事から生まれました。ユネスコはアフリカの若い女性映像作家たちが自らの声を世界に発信していくことを支援します。このプロジェクトに約600名が応募してきたということは、受賞者10人以外にも、多くの支援の必要性、可能性があることを示しています。このワークショップは選ばれたアーティスト10名を支援するだけでなく、それ以外の映像作家たちの創作活動がしやすい環境づくりを応援する必要があると、各国の政府に向けたメッセージにもなるでしょう。こうしたワークショップを支え、法律面、仕組み、資金的な援助等、残された課題に取り組む必要性を考え、とりわけアフリカの女性に向けた活動にユネスコは寄り添っていきたいと考えています。」

続いて河瀬直美監督が「Grand voyage with Africa」の紹介となぜアフリカの女性映像作家を招聘するかの理由を語りました。

「日本では時に大災害を起こす自然が私たちに脅威をもたらしますが、だからこそ日本人は自然を敬う気持ちを抱き、自然の中に神を見出してきました。私は、そうしたことはアフリカにもあるのではないかと思います。アフリカの映像作家たちが私の撮影した森で何を感じてくれるのか、人類が本当に大切にしなければいけないものを知らしめるようなものを映像で残してもらえるのではないかと期待をしています。また、これが女性だけで行われるということにも重要なことがあるのではないかと思います。先ほどアズレーさんがおっしゃったように、女性作家たちが世界に出て行きづらい環境があります。すごく環境が悪い場所において、でも非常に才能のある女性たちが、世界に出て、出会うことがなかったような人たちと出会い、そこに対話が始まり、新しい扉が開かれる、これこそがアズレーさんの推奨している、世界中の人たちが大切なものを見つける、それを平等に世界中の人たちが享受できる、そういう場所の誕生になるのではないかと考えています。」

「私はアジアでまた日本で、でも東京ではなく奈良という地方都市で、映画の神様が舞い降りてきてくれてカメラをもたしてくれた、その軌跡、その前まではバスケットボール選手だったので、カメラを手にしたときに（私の撮った）映像の世界が海を越えるなんていうことは夢にも思わなかった、ただ自分の足元に転がっている小さなものを撮影していた、それが国際的な映画祭を通じて海を越えて海外にもたらされた、それを見てくれた人たちが、私はフランス人だけれども、あなたの国にも同じような光が降り注ぎ、同じような風が吹いているのだね、とってもらった時に、ああ映像は海を越えるんだ、共通の認識を持つことができるんだ、という風に感じて、本当に一つ一つの、一步一步の軌跡を信じて 30 年間歩んできました。そしてこの歳になって何を伝えていけばいいのかな、と考えたときに、言語や文化は違うけれど、映像の言語というのがあるはずで、そこでは私たちは同じものを見つける旅をすることができるのではないかと思うのです。もちろん私もこれまで沢山のいばらの道を通って来ましたが、その中で苦労したからこそわかるものがある、またそんなことをしなくてもいいものがあるだろう。そういったことを次の世代の人たちに伝えていきたい。そういう意味で、こういうプロジェクトと一緒にできることは本当に素晴らしいことだと思います。みんなが寄り合って新しい扉を開くということは素晴らしいことだと思います。」



ユネスコ本部大ホールで行われたユネスコと「なら国際映画祭」の共催による発表会

その後、アズレー事務局長と河瀬監督が交互に以下のレジデンス招聘決定者 10 名を発表しました。

ブルキナファソ: デルフィーヌ・イエーバンガさんとフロリアンヌ・ズンディさんの 2 名。

南アフリカ: オクレ・ジョソブさんとティシウェ・ジクブさんの 2 名。

ケニア: ジョアン・キラゲさんとリディア・マタタさんの 2 名。

セネガル: アワ・ゲイエさんとファマ・レヤンヌ・ソウさんの2名。

ナイジェリア: マヨワ・バカラさんとウレン・マクトゥさんの2名。

彼女たちは2020年3月30日(月)~4月12日(日)の2週間、カンヌ映画祭グランプリ作品「殞の森」の舞台となった奈良市田原地区で撮影合宿を実施し、2人1組で短編映画を撮影して、その完成作を9月18日(金)~9月22日(火・祝)に開催する「なら国際映画祭2020」で舞台挨拶とともに上映することになっています。

同発表の後、山田滝雄ユネスコ日本代表部大使、南アフリカ大使、ブルキナファソ大使、セネガル大使、ナイジェリア大使、ケニア大使による挨拶が続き、閉会となりました。

大ホールでの発表会が終わると、場所を向かいにある小ルームに移して、日本人記者3名、外国人記者2名による河瀬監督へのインタビューが行われました。



発表会後の河瀬監督の記者会見の様

筆者はブルキナファソにいた頃、何度も FESPACO のミシェル・ウエドラオゴ事務局長(当時)と会い、日アフリカの映画協力、特に監督同士の交流について語り合い、具体的な要請も受け、日本の監督とも個々に話したりしましたが、それが今、こういう形で組織的な協力の素地ができたことに非常に感銘し、嬉しく感じました。

以上